

2026年3月29日「キリストを十字架につけた民衆」

ルカの福音書 23章 13～25節

今年も受難週を迎えました。今週と来週は連続説教をお休みとし、本日はイエス・キリストの受難の出来事から学んでいきましょう。

1. ピラトの取り調べ (13～16節)

①ピラトは呼び集め (13)「ピラトは祭司長たちと指導者たちと民衆とを呼び集め、」

ピラトはローマの地方総督で、普段は地中海沿いのカイザリヤに駐在していました。ユダヤ人の祭りの期間には、取り締まりもありエルサレムに來ました。今回は、過越の祭りのためにピラトはエルサレムにいたのです。そして、尋問をしていたイエスの扱いについて決めるため、祭司長たちと指導者たちと民衆も呼び集めたのです。

②罪は見つからず (14)「こう言った。『あなたがたは、この人を、民衆を惑わす者として、私のところに連れて來たけれども、私があなたがたの前で取り調べたところ、あなたがたが訴えているような罪は別に何も見つかりません。』」

ピラトがイエスを尋問したことについては、23:1～5に記されています。そこでピラトは、祭司長や群衆に「この人には何の罪もない」と言っています。そこで彼らは反論し、イエスがガリラヤやユダヤ全土で民衆を扇動していると訴えています。イエスはヘロデからも尋問を受けて、再度ピラトの所に戻されたというのが13節以下です。ここでもピラトは、イエスには罪が見つからないと述べています。

③懲らしめをして (15～16)「『ヘロデとても同じです。彼は私たちにこの人を送り返しました。見なさい。この人は、死罪に当たることは、何一つしていません。だから私は、懲らしめたうえで、釈放します。』」

ピラトはここで、「ヘロデとても同じです」と述べています。このヘロデというのはヘロデ大王の息子でヘロデ・アンティパスのことで、ガリラヤとペレヤの国主でした。彼は実兄ヘロデ・ピリポの妻を奪って結婚したことで知られています。さて、ヘロデもイエスには死罪に当たる罪は認めないと言っていることから、ピラトはイエスに懲罰を課した上で釈放すると言っています。

2. 民衆の要求 (18～21節)

①この人を除け (18)「しかし彼らは、声をそろえて叫んだ。『この人を除け。バラバを釈放しろ』」

しかし、祭司長たちや、扇動されていた民衆は、声を揃えて『この人を除け(新改訳2017年度版「その人を殺せ」)、バラバを釈放せよ』と叫びました。この件に関しは、脚注にもあるように、異本においては17節があります。「さて、祭りのときピラトは、彼らのために一人、釈放してやらなければならない」とあります。それはマタイ27:15にも記されていて、



ます。それに基づき、民衆はバラバを釈放することを求めたのです。

②バラバとは (19)「バラバとは、都に起こった暴動と人殺しのかどで、牢に入っていた者である。」

そのバラバについては、「都に起こった暴動と人殺しのかどで、入獄していた」と説明されています。ローマの支配からの解放のために武力で政治活動をしていた人だとも言われています。

③十字架につける (20~21)「ピラトは、イエスを釈放しようと思っ
て、彼らにもう一度呼びかけた。しかし、彼らは叫び続けて、
『十字架だ。十字架につける』と言った。」

しかし、総督ピラトはバラバよりもイエスを釈放したいと思っていたのです。そこで、彼は再び人々に訴えたのです。「私はこのイエスに罪を見つけることができません。彼を解放したらどうか」と。ところが民衆の側では、「イエスを十字架につける」という声が高まっていきました。民衆をたきつける存在がいたことは確かでしょう。

3. イエスの十字架刑が決まる (22~25 節)

①釈放するつもりだ (22)「しかしピラトは三度目に彼らにこう言った。『あの人
がどんな悪いことをしたというのか。あの人には、死に当たる罪は、何も見
つかりません。だから私は、懲らしめたうえで釈放します。』」

ローマ人であるピラトにとっては、ユダヤの民がどうしてこれほどに、イエスを十字架につけることに執着するのかがわかりませんでした。彼は、今回は三回目になるわけですが、繰り返して言ったのです。「あの人には死刑にするような罪は見つかりません」。祭司長や民衆が、冒涇罪を主張したとしてもそれらは、十字架につけるほどではないと判断していたのです。そこで、「私は、懲らしめた上で釈放します」と言ったのです。

②その声勝った (22)「ところが、彼らはいくまで主張し続け、十字架につけるよう
大声で要求した。そしてついにその声勝った。」

ところが、民衆は総督ピラトが解放宣言しているのにもかかわらず、あくまでもイエスを十字架につけるようにと主張し続けたのです。その声は増幅していきました。そしてついに、「イエスを十字架につけよ」という声はその場を支配するほどになったのです。

③イエスを引き渡したピラト (24~25)「ピラトは、彼らの要求どおりに
することを宣告した。すなわち暴動と人殺しのかどで牢に入っていた男を願
いどおりに釈放し、イエスを彼らに引き渡して好きなようにさせた。」

民衆の叫び声はすさまじいものだったのでしょう。ピラトは民衆の要求どおりにするしかありませんでした。すなわち、バラバを釈放することを決め、イエスについては、「彼らに引き渡して好きなようにさせた」とありますが、「彼らの求めるままに、十字架へと引き渡した」(聖書協会共同訳)とあるように死刑判決を言い渡したのです。

《展開と結論》 私たちが毎週唱和している使徒信条においては、「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架つけられ、死にて葬られ」とありますが、今朝の聖書記事を読むと、彼は当初イエスを十字架につけることについては消極的であったことがわかります。とはいえ、ローマの地方総督として最終判決を下したということは事実ですから、使徒信条の節文は正しいわけです。それにしても、もしイエス・キリストがピラトによって釈放されたら、歴史はどうなっただろうかなどと考えるのは、意味のないことです。むしろ、旧約聖書のイザヤ書にある「彼は私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために碎かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた」(53:5)という預言の言葉が歴史の中に働いて成就していったと読むことが正しいと言えるでしょう。

使徒信条にあるように、イエスの十字架刑の最終判決を下した責任はピラトにあるわけです。しかし、その過程を見ていくとご一緒に読んできたように、民衆の「イエスを十字架につける」という大合唱があったからこそ、イエスの十字架刑は決まったことは確かです。そして、その背後には祭司長たちや扇動していたことも間違いのないところであります。かつて、ヒットラーの魔力のような演説によって、ドイツ国民は「ハイレ・ヒットラー」と叫び、そのナチスの働きを底支えしていったことを思うと、民衆がなしてしまったことの罪の大きさというものを、しっかりとらえておかなければならないでしょう。ピラト一人にその責任を押し付けた良いはずがありません。まして、ピラトは三度もイエスの釈放を訴えていたのです。民衆のなかには、イエスの話を聞き、その恵みにあずかった者たちもいたでしょう。ここに、「私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの自分勝手な道に向かって行った」(イザヤ 53:6)という御言葉を思うのです。それゆえ羊飼いである主は犠牲を払ってくださったのです。「しかし、主は、私たちすべての咎を彼に負わせた」とありますが、イエス時代の民衆ばかりでなく、私たち自身もイエスを十字架につけてしまった張本人であることを認めていかなければならないのです。

もう一つ見ておきたいことは、ピラトもヘロデも、イエスには「罪を見出せなかった」という点です。彼らはイエスに尋問しても、イエスの高邁で聖いご人格のゆえに、罪を見出すことが困難だったのです。また、「キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りもみいだされませんでした」(Iペテロ2:22)とあるように、実際のところ罪を見出すことが困難であったということは理由のあるところでありました。また、そのようなお方であったればこそ、私たちの罪を贖うという出来事が可能なのです。

今朝、私たちは信徒学習会において、私たちの罪について考えました。私たちの心のなかには隠されている罪が潜んでいます。どこかで気が付いていても、それを認めようとしない自分があることもあります。それは些細な日常のこともあれば、そうではないこともあります。いずれにせよ、それを主の前に告白することは、キリストの十字架の死を無駄にしない道です。また、聖なる主から赦されていく道なのです。(第一ヨハネ1章9節)